

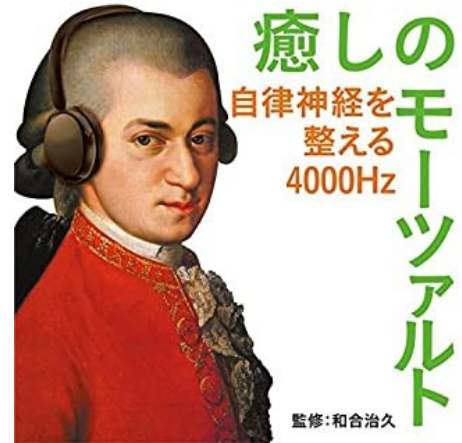
第13回 BACHスクリーンコンサート 2022. 6月

6月のテーマ ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

モーツァルトの曲には高周波音が多く含まれており、その高周波音が脳幹を刺激して、自律神経のバランスを整えてくれるとのこと。自律神経系に働きかけるモーツァルトの曲は、リラックス効果をもたらすだけでなく、血圧や心拍の安定、血流の改善、体温の上昇による免疫力の向上等にも影響するそうです。

その理由は、一定のフレーズの繰り返しが多く含まれるため、この繰り返しは、心拍音、そよ風、川のせせらぎなど自然音のパターンに含まれる「ゆらぎ」と同じ効果があり、リラックス感につながる副交感神経を優位にしてくれるのだそうです。そのため、音楽セラピーの活用にもモーツァルトの曲が多く利用されています。

室内楽から交響曲などさまざまな作曲数はその数626曲にもなります。

**1、きらきら星変奏曲 (7分)**

正式には『「ああ、お母さん、あなたに申しましょう」による12の変奏曲』と呼ばれています。フランスで当時流行していた恋の歌（シャンソン）でした。これをモーツァルトはピアノ用に編曲したのです。日本では「きらきらひかる 夜空の星よ」の歌詞で知られていますが、当時流行したシャンソンの歌詞はそうではなく、娘が母親に恋心を歌っています。

2、ピアノソナタ第11番（トルコ行進曲） K.331 (3分)

第3楽章が有名な「トルコ行進曲」。「トルコ行進曲付き」と呼ばれることが多い。17世紀後半から18世紀に、西洋で当時大帝国であったオスマントルコへの恐れと憧れから「トルコ趣味」が流行り、西洋音楽にも「トルコ風」が色濃く影響していました。丁度その時代に活躍していた偉大な作曲家ベートーベンとモーツァルトが刺激を受けて、「トルコ行進曲」を作曲したとのこと。

3、ピアノソナタ第16番第1楽章 K.545 (3分30秒)

この第1楽章は、初心者のための小さなソナタ[1]と記され、ピアノ練習曲としてあまりにも有名なメロディーです。

4、魔笛から夜の女王のアリア (3分)

夜の女王のアリアは、オペラでの世界で数人しか歌えない技巧的な歌唱で有名な曲です。ソプラノの中でも特に高い音域で、軽やかに技巧的で華やかな装飾音を歌う曲です。オペラ『魔笛』の第2幕で歌われ、原題は『復讐の心は地獄のように胸に燃え』と何と

もすごいタイトルです。

5、クラリネット協奏曲 イ長調K.622 第2楽章 (7分)

モーツァルトが書いた最後の協奏曲(死の2ヶ月前に完成)であり、2楽章はその澄み切った曲想から、彼の「白鳥の歌」と呼ばれることもあります。

6、デヴェルティメント (K.136) (4分)

第1楽章を朝めざめて一番に聴くと、今日も頑張ろうとそんな気になります(主観的感想ですが!)。モーツァルト父子と親しい音楽仲間と演奏するために作曲したものと言われ、デヴェルティメントはK.136, K.137, K.138の3曲があります。

7、管楽セレナード第13番 (K525) 「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」(15分)

小さな夜の曲という意味で、「小夜曲」と訳されている。「小夜曲」は「セレナーデ」の訳語として使われています。

8、ピアノ協奏曲第21番第2楽章 K467 (7分)

スウェーデン映画「みじかくも美しく燃え(1967年)」やアメリカ映画「スーパーマン リターンズ(2006年)」で使われていることでも有名です。

9、交響曲第25番第1楽章 K183 (8分)

映画『アマデウス』の冒頭部分で使用されたことで有名。モーツァルトを紹介するときにもよく使われる曲です。

10、交響曲第40番第1楽章 K550 (7分)

モーツァルトの作品の中でも有名なものの1つです。モーツァルトの交響曲のうち短調のものはこの作品を含めてわずか2曲しかありません。

11、フィガロの結婚より序曲 K492 (4分30秒)

数多くある歌劇の序曲の中でも 生き活きと、かつ わくわくさせるという意味で、これほど面白い序曲はないと言われています。

12、レクイエム ラークリモーサ(涙の日) K626 (5分)

モーツァルトの絶筆となったと言われている楽曲で、モーツァルトはこの曲の8小節まで書いてペンを置き、その後そのまま帰らぬ人となったとされています。

悲しみに満ち溢れた旋律がまさに昇りつめたところで絶筆となっていることもあり、大変ドラマティックで有名な楽曲です。

「レクイエム」とは死者の安息を神に願うためにカトリック教会で行われる「死者のためのミサ」のことで、そこで用いられる楽曲も「レクイエム」と言います。

この世のものとは思えないような美しい旋律が心に迫ってきます。